エンパワメント系

ベトナム・中国・日本・教育・福祉研究ネットワークチーム

桂 良太郎

(国際関係学部教授)

○桂 皆様、おはようございます。立命館大学国際関係学部の桂と申します。

対人援助学の創生のために、オープン・リサーチ・センターの整備事業であります「臨床人間科学の構築」のなかから、私どもは「ベトナム・中国・日本・教育・福祉研究ネットワークプロジェクト」の発表に入らせていただきます。

発表のまえに人間科学研究所の望月先生、それから今回のプロジェクトの準備にご苦労されたスタッフの皆様方に、まず心から御礼申し上げます。

限られた時間ですので、私どものプロジェクトの成果の要点を発表したいと思いますが、このベトナムチームの特色は、実際に学生たちと一緒にベトナムのホーチミン、またはハノイにございます障害を抱えている子供たちの施設にて、当地の大学の協力のもと、当地の大学生たちといっしょになって、「サービスマーケティング」を行ったということが大変重要な私どものプロジェクトの特色であります。

それともう一つは、荒木穂積教授を中心として、こうしたサービスマーケティングの活動を通じて、ベトナムにおける知的障害児、特に精神障害を含めて、さまざまな目に見えない障害を抱えている児童に対する教育や福祉制度を今後どのように整えていかなければならないかという事柄に関して提案、提言していくことがこのプロジェクトのもうひとつの目標であります。つまり、ハード・ソフトにかかわる問題をともに考える、そういうプロジェクトでございます。

そのために、きょうは大きく三つの活動領域から御報告したいと思います。そのメインであります「ベトナムの障害児の教育福祉セミナー」の実践という試みの概要を、それから第2点目は、今荒木穂積教授を中心に実施し

ている立命館大学の国際シンポジウムであります、「東アジアの障害者教育福祉シンポジウム」の取り組みの成果から、そして最後に、現在進行中でございますが、「就学前の発達支援にかかわる調査」の試みの3点を報告したいと思います。

お手元の資料にまず第1点に関しましては、きょう追加資料を用意しておりますけれども、私どもの活動は、後ろのパネルを観ていただいたらよりお分かり頂けると思われれます。これまでの活動してきた写真を載せております。このベトナム障害児教育福祉セミナーは毎年一回、夏休みのお盆明けに、約10日間を利用して、現地の教育大学の、特に障害者福祉や教育に関心のある、専門家と学生たちと一緒にになりまして、施設に出向き、「サービスマーケティング」を行うわけですが、このセミナーの特色は、実は始める前と実施後が実は非常に重要であります。立命館大学の学生たちが企画研究に応募しまして、そして今までの16回（16年間）の取り組みがどういう取り組みをしてきたかということをふり返り、そしてこのプロジェクトの意義や目標を学生にわかりやすく伝えています。そして、学生たち一人ひとりが持っている学びとそして成長のために、それぞれの学生に合うプログラムを考えます。そしてこの学生がベトナムへ行って、こういった点を見れば、きっと成長するだろうということを論議して現地に入ります。当然学生たちはベトナムの歴史、地理、やさまざまな基本的なアイテムを網羅して現地に臨みますが、毎回学生にとってははじめての経験でございますので、つまり、風土や生活様式の異なるなかでの文化的ショックがあります。そういう異文化理解にかかわるアダプテーションを私どもがサポートしながら、特に現地の施設にて、たとえ短い期間であっても、非常に教育的には効果のあるサービスマーケティングを実施しております。

学生たちがその事業に取り組んできた成果は、帰国後、立命館大学は必ずオープンゼミナールという形で、発表を行っております。企画研究は企画研究として、これは学生たちが発表した内容について報告書をまとめております。このようにして、一人ひとりの学生の成果、同時にチームとしての成果をまとめさせていただいたのが、1から4ページに掲げました。このプロジ

エクトは、非常にマスコミからも注目されていたということも御紹介したいために、これ2006年9月23日の読売新聞の記事も載せております。このプロジェクトは、私どもがベトナムにかかわって16年以上経過するわけですが、当初はベトさんドクさんという例の二重双体児がベトナム戦争によって、特に枯葉剤によって生じた大きな被害児の社会的問題について考えてきました。いまは、ベトさんドクさんだけでなく、すべての障害を抱えた子供たちの未来について考えていくようにしております。そういう国際関係、また国際交流、または国際協働の視点からも、このプロジェクトは大変意義のあるプロジェクトだと思っております。特に、学生たちにとりましては、先ほど申しましたように、サービスマーケティングを通じての異文化理解と同時に、障害を抱えているすべての世界じゅうの児童に対する視角や視点というものをやはりきちっと研究や教育のレベルまで成就させなくてはならないと考えております。

御存じのように、立命館大学はインスティテュートというものがありまして、さまざまな学部を超え、研究をこの対人援助学に向けて参画しております。産業社会学部の学生たちが中心であります。私どもの国際関係学など学部を超えたり、またこのベトナムのセミナーの大きな特色は、立命館大学だけではなく他の大学と協働しながら進めている点に特色があります。

それでその成果が、第2番目の私どもの成果として、こういう形で特にベトナムだけではなくて、東アジアも含めて障害児に関する福祉教育、または臨床研究において今後知的障害を抱える国々、特に急激な近代化のなかにある中国、そして東南アジアも含めて、これからの日本とアジアとの関係をハードでなくて、こういう教育や福祉の領域のソフトな領域から考えなくてはいけないという事でこのシンポジウムを毎年開催しております。2007年10月28日に、キャンパスプラザで、資料6ページを御参照いただければよくご理解いただけると思っておりますが、こういう形でシンポジウムを開催しました。

立命館大学は、客員研究員の研究者を毎年学術交換交流という形で、ハノイとホーチミンの師範大学、日本で言いますと教育大学ですが、そこから2名を毎年招聘しております。私と荒木先生、または津止正敏先生がかわりに

交換という形で、当地の大学で特に障害児教育に携わろうとする専門職、向こうではまだまだ障害児教育、または障害児研究が非常にまだ発展途上の状況でございます。そういう中で、お互いに知恵を出し合い助け合っております。

最後になりますが、現在荒木教授を中心にしまして、日本における知的障害を抱える家族を専門的な臨床研究、または対人援助教育の立場からどのようなサポートができるかという、そういう発達障害児を抱える家族の支援のための調査というものを今試みているところでございます。こういう形で私どもの研究成果は、ただベトナムを研究するだけではなくて、ひろくアジアを含めながら、特に障害児福祉教育のなかで一番おこなっております知的障害児教育福祉の発展向上に努めているところでございます。

以上が、私どものベトナムチームから考える対人援助学の報告でございます。どうもありがとうございました。質問等をぜひお願いしたいと思います。ありがとうございました。

○**司会** どうも桂先生、ありがとうございました。時間がございますので、質問とか質疑等、御意見などをちょうだいできればと思います。何か質問とか御意見ありますでしょうか。

○**質問者** このベトナムのプロジェクトは立命館の一つの顔になっているプロジェクトですが、先ほど研究センターでずっとなされているという話だったんですけども、私どもも今京都の中で、いわゆる特別支援教育とか、個別支援教育という形で対象者の変化等、それから学校の先生の中での変化ですね、そういうものをどう評価していくというシステムをつくる活動にかかわっております。ここで書かれている内容と学生たちの変化もそうですけれども、いわゆる評価はどのように進められておられますか。

○**桂** 評価の問題は非常にむずかしい問題だと思っております。本当にこのプロジェクトが成立しているかどうかという部分に関しては、先生が言われましたように、評価のあり方が非常に重要な問題であります。私どもがベトナムの人たちと出会い、そして16年間継続してまいりまして、やっと本音で現地の人たちとやりとりができるようになったと思っております。当初はこのプロジェクトは、上からかかわっているような、つまりベトナムドクさん

をまさしく支援するために援助のあり方を考えてきました。お互いに対等、平等であると言っても、当初は援助する側とされる側になりまして、真の国際交流のあり方からは検討課題の多い活動でした。それが長年かかわってきた賜物だと実感していることは、お互いがお互いの違いや共通性を認識し合えるようになりました。それは私どもは、主観的な評価としては非常に嬉しいことだと思っておりますが、これからはもっとアカデミックな活動として、サービ斯拉ーニングというあたらしい取り組みの理論化をしていかなくちゃいけませんし、今おっしゃられたように、この活動をどういうようにアセスメントするかということ関しましては、さまざまな研究者、または実践者からのアドバイスをいただきながらすすめていかなければならないと思っております。よいご質問ありがとうございました。

○**司会** 私からもひとつ質問させていただきます。私もベトナムには何回か行かせていただき、ベトナムが非常に日本と近い関係にあることを実感しております。そこで今後のこのプロジェクトの方向性または、将来的な課題についてどのようなことをお考えかをお聞かせください。特に異文化理解教育との関わりなどからお答えください。

○**桂** 私ども教員は、これからは学生がもっと主体的にこのプロジェクトに参加ではなく、参画してくれることを望んでおります。学生たちがこのプロジェクトを通じて何を感じ、何を学び、そして何が一人の人間として行動に移すことができるかをこのプロジェクトを通じて一人ひとりの学生たちが、成長発展していってくれることを切に望んでおります。このプロジェクトは、先ほど申しましたように、お互いが「知り合い」、「助け合い」、そして「創り合う」という三つのステージがあるように思っております。異文化理解教育の問題は先生の御指摘どおり非常に重要な問題だと認識しております。そしてそこから彼らは文化とは何か、社会とは何かということを、このプロジェクト研究等の営みから、より深く考察し、学んでいってくれることをこちらから願っております。

○**司会** ありがとうございました。それでは、教育・福祉ネットワークチームの発表を終わりにいたしたいと思います。どうもありがとうございました。